

## 大阪桃山病院ができたころ

ネットで桃山病院跡に慰霊碑があることを知り、鶴橋から現地に向かった。スーパー駐車場脇に写真の慰霊碑が立っていた。碑文を読もうとしたが、「大阪市立桃山病院長熊谷」しか分からなかった。ネットに元大阪市環境保健局医務監・水原完氏の『生活衛生』29-6(1985)「談話室」掲載、標題の論文が掲載されていたので、すこし紹介したい。



コレラが大流行したあと、明治 20 年 3 月桃山筆ヶ崎の地 6300 坪に、木造の本建築病舎が建てられて、桃山病院は伝染病流行に応じて臨時開設することとなった。明治 22 年 4 月 1 日大阪市制がしかれ、同年 10 月避病院規則が制定され、嫌われていた避の字を抜いて、市立桃山病院と市立天王寺病院の 2 ヶ所となった。明治 29 年 4 月 1 日市立病院規則により、常時桃山病院を開設。明治 30 年伝染病予防法制定。桃山病院の地も大阪市の市域拡張で東成郡から市内編入、南区となった。……第 6 代院長熊谷謙三郎と続き昭和に至った。50 周年に当たる昭和 12 年に鉄筋地上 5 階地下 1 階の全館完成、戦中戦後を経て今日に至る。(先の慰霊碑の「熊谷」は熊谷謙三郎院長のことであろう)



桃山の地を古い史料でみると、江戸時代寛政 8 年(1796)刊「摂津名所図会」に、四天王寺の東の野辺国分村から北へ小橋村に至る間の上町台地東斜面は、百済野と呼ばれたが、また桃山ともいわれ、味木原とも呼ばれる陽花宴の景勝地であった。寛政 12 年(1800)「浪花の梅」には、桃山の桃畠として画かれている。弘化 4 年(1847)の「摂州大坂全図」をみると、今の桃山病院・日赤病院・環境科学研究所の辺りは人家はなく田畑であり、安政年間「摂津名所図会大成」に、南は天王寺北は玉造までの間、一円の桃畠にして、晩春の頃は花の紅に天も酔る光景なり、と書かれている。この安政年間に、緒方洪庵の適塾に入門していた福澤諭吉が、同塾生とともに北浜から桃山へ花見に行ったことが、「福翁自伝」にも書いてある。

このような江戸時代の様子が、そのまま明治初期に続いた。新時代となり市街地の発展に伴って、住宅地域学校適地として絶好の場所とみられ、明治 20 年桃山病院、23 年にキリスト教系高等英学校(後の桃山中学校)が桃山病院の西北に建設され、その北側に 29 年国の大阪痘苗製造所ができた。桃山病院の正門と患者通用門は、敷地の西北側痘苗製造所(後に赤十字病院)との間の道路に面していた。病院の東側は田や畑であった。昭和 4 年熊谷謙三郎院長・水原廣副院長コンビの時、現存する鉄筋 5 階建の工事着工のさい、正門は現在の細工谷町側の東南角に変更された。こうして社会や伝染病流行の変遷はあったが、1 世紀にわたり同じ桃山筆ヶ崎の地に、伝染病院として感染症センターとして現在に至り、先人の伝統を継ぎ 2 年後に創立 100 年を迎える。

(2020 年 5 月 12 日)